

2. 昭和38年度配布精液による乳牛の受胎調査並びに  
昭和37年度配布精液による産子調査

秋永達雄、遠畑晃、荒岡昭司

1. 総括

種別	人工授精頭数		受胎	不受胎	妊否不明	平均授精
	実頭数	延頭数	頭数	頭数	頭数	回数
乳牛	3,213	5,316	1,748	730	735	1.65

種別	受胎率		37年度産子成績				
	実頭数に対し	延頭数に対し	♀	♂	性別不詳	流産	死産
乳牛	70.5%	38.1%	612	449	548	45	10

2. 受胎成績の分析

(1) 乳用種雄牛別受胎成績

種雄牛名号	生年月日	産地	人工授精頭数	受胎頭数	受胎不明頭数	受胎率
カーネーション モデルマスター	5.26.38	米 国	18	9	7	31.8%
イムペリアルベツシー トリストラーッド	30.6.14	場 産	596	348	121	73.2
オ19ガバナー ベツローヤルキング	32.6.7	北海道	168	111	26	78.1
イムペリアルミドリ サートリストラー	33.9.8	場 産	599	337	109	68.7
ロベツスマドキャップ サンデー	34.9.11	北海道	15	7	6	77.7
スプリングホープフル アマバサダラッド	35.10.14	場 産	521	256	141	67.3
バタボーイ トリストラーミドリ	35.12.15	北海道	599	342	163	78.4
シノーカローベル ミドリアフリカー	36.7.27	場 産	362	181	68	61.5
オ33ウオーカー ベルリーガル	36.12.1	岩手県	293	142	81	66.9
ロベツスマデル アールケエ	37.2.27	場 産	42	15	13	51.7
計			3,213	1,748	735	70.5

## (2) ホルスタイン種雄牛の季節別受胎成績

季 別	人工授精頭数		受 胎 頭 数	性 否 不 明 頭 数	受 胎 率		備 考
	実頭数	延頭数			実頭数に対し	延頭数に対し	
春	1,006	1,673	638	224	81.5	44.0	4月~6月
夏	701	1,356	399	167	74.7	33.5	7~9"
秋	748	1,286	440	170	76.1	39.4	10~12"
冬	758	1,001	271	174	46.4	21.0	1~3"
計	3,213	5,316	1,748	735	70.5	38.1	

## (3) ホルスタイン種雄牛の地域別受胎成績

地 域 別	人工授精頭数		受 胎 頭 数	性 否 不 明 頭 数	不 性 頭 数	平均授精回数	受 胎 率	
	実頭数	延頭数					実頭数に対し	延頭数に対し
区 内	50	80	21	22	7	1.6	75.0%	36.2%
面多摩郡(市部を除く)	2,161	3,673	1,312	305	544	1.6	70.6	38.9
南多摩郡( )	365	521	61	216	88	1.4	40.9	20.0
北多摩郡( )	541	882	322	163	56	1.6	85.1	44.7
都 外	96	160	32	29	35	1.6	47.7	24.4
計	3,213	5,316	1,748	735	730	1.6	70.5	38.1

## (4) 雌牛の回数別受胎成績

回 数 別	人工授精頭数	受胎頭数	不性頭数	性否不明頭数	受胎率	受胎総頭数に対する割合(%)
1	2,028	1,072	371	470	65.3	61.3
2	705	374	198	169	69.7	21.3
3	234	141	60	42	73.4	8.0
4	149	92	59	33	79.3	5.2
5以上	97	69	42	21	42.1	4.2
計	3,213	1,748	730	735	70.5	100.0

## (5) 前年度の比較

年 度 別	人工授精頭数		受 胎 頭 数	不 受 胎 頭 数	性 否 不 明 頭 数	受 胎 率	
	実頭数	延頭数				実頭数に対し	延頭数に対し
37	3,080	5,273	1,664	662	454	71.5	36.8
38	3,213	5,316	1,748	730	735	70.5	38.1

## おすび

当場において、配布した精液による乳牛の受胎、並びに産子の状況を握し、人工受精事業上の資料を得る目的をもって、本調査を実施した。その結果を要約すると、受胎率は、全般的に前年度より稍々向上しており、地域別にみると、北多摩地区が最も高く、次いで、西多摩地区、南多摩地区の順となっている。又季節別では、春季が最も高く、以下、秋、夏、冬の順に低下し、一般的成績とはほぼ一致している。しかし乍ら、全般的な傾向として、都下の乳牛の受胎率は依然として低く、このことは、急速な規模拡大による労働力不足、耕地の減少等に伴う、飼養環境の悪化、並びに人工授精技術水準の低さ等に起因するものと考えられるが、反面、更新牛の補充については、他からの優良牛取得の困難性等から、経営内での繁殖更新に依存する傾向が強くなりつつあるので、優良精液の生産、並びに繁殖技術の向上を図るとともに、畜力管理等、飼養技術改善に関する技術の普及徹底を図る必要があると思われる。

## 3. 豚の骨格構造と産肉性に関する研究

宮川正夫、菅原兼太郎、大橋昭也

### まえがき

本研究は農林省の総合助成をうけて、3年計画で、昭和37年度より開始し本年は2年目である。当初豚の椎骨数の変異について調査研究を実施したが、本年は更に椎骨数の異なる豚の飼養試験を行い、体重90kgをもって屠殺解体し、肉、脂肪、骨の割合等について調査研究を行った。

### 1. 研究目的

豚の椎骨数には変異があつて、椎骨数の多いほど中軀に伸びがあり、屠体においては屠体長や背腰長が長く、しかも産肉量が多く飼料の利用性にすぐれているといわれているので、豚の改良選抜上の基礎資料を得るための本試験を実施した。

### 2. 研究方法

#### (1) 椎骨数の発現調査

##### 1. 調査頭数

ヨークシャー種	412頭
ヨンドレー種	36頭